

YOGAって 競泳水着

『高嶺の花』だと思っていた祐子先生は、
ただの『臭い花』だった。

ヨガインストラクター
小島 祐子 (32歳)



YOGAって競泳水着

俺の名前は進藤あきら。
毎日平々凡々と過ごすしかないサラリーマンだ。
彼女はもう何年いないかな…
周りの友達は次々に結婚していき、独身でいる事に劣等感を感じ始めていた。
親からも「あんた結婚相手はいないの？」と言われる始末。
そろそろなんとかしないとマズいかな。。。

そんな経緯で、俺は「体を引き締める為」という建前で、ヨガ教室に通い始めた。
なぜヨガを選んだかという、理由は簡単。
女子が多いから。
本当の狙いは、ヨガに通う女子との「出会い」だ。
体を引き締めつつ、女子との距離も縮められる…まさに一石二鳥だ。

でも、残念ながら人生はそんなに甘くなかった。
入会したヨガ教室は俺以外みんな女子だったが、そのほとんどが年増の人妻だった。
ざっと見渡しても、とても恋愛できるような相手はいなかった。

あきら「こりゃダメだな。」

俺の結婚大作戦は、何も出来ないまま幕を閉じた。





あきら「いや、待てよ…」

彼女はインストラクターの小島祐子さん。
確か祐子先生は独身だったよな。
会員の女子ばかりに目がいったけど、祐子先生ってかなり美人だ。
いや、この教室の中で一番綺麗なんじゃないか？

ただ、「先生」と呼ぶせいか、どこか近寄りがたいガードの強さを感じてしまう。
結婚していないとはいえ、あのルックスだったら彼氏くらいいいそうだし。
俺なんかがどうにかできる相手じゃないか…

あきら「やっぱりダメだな。」

俺はその日のレッスンを最後に、退会を決意した。

その日の帰り道、虚しさを感じながらバッグからスマホを取り出そうとした。

あきら「ん…？」

スマホがない。
どうやら更衣室に忘れてきたみたいだ。
今日は俺のレッスンの時間帯がラストだったから、もしかしたらスタジオも閉まっているかもしれない。
特別必要なわけでもないけど、手元にスマホが無いのはどうも落ち着かない。
俺はダメ元でスタジオに引き返すことにした。

灯りはほとんど消えていたが、ある一室の電気だけがついているのがわかった。
まだ誰がいるようだ。

あきら「助かったあ。」

玄関のドアに手をかけると、鍵も開いている。
俺はさっと中に入り、スマホだけ取って帰ろうとした。

予想通り、更衣室のロッカーの中に俺のスマホは置いてあった。
スマホを手にし、更衣室を後にすると、奥の電気のついた部屋から何やら声がするのが聞こえてきた。

男の勘というヤツだろうか、無性に胸がドキドキした。
ドラマの見過ぎか、AVの見過ぎか…きっとあの部屋で、何かが行われている。
俺は期待的確信を持って、恐る恐るその部屋の方へと足を運んだ。





あきら「…………っ!？」

祐子先生だ…。
俺はとんでもないモノを見てしまった。
そして、その光景からなかなか目が離せない。

祐子「んはぁ…ンッ……あっ…あぁ……んっ…んふう……」

(おいおい、祐子先生ってあんなに毛深いのか?)
(自分のパンティを嗅ぎながらオナってるよ…)
(臭そうだ…何から何まで臭そうだよ、祐子先生!)

前言を撤回しよう。
俺はまだ辞めない。
だって、高嶺の花がこんな臭い花だったなんて思ってなかったから。
俺はこの「臭い現場」を写真と動画でスマホに収めた。

天は俺を見放してはいなかったようだ。

次のレッスンから、俺の中で祐子先生を見る目が明らかに変わっていた。
あの日以来、俺は盗撮した動画を何度も見ては、オカズにしてきたからだ。
彼女はヨガインストラクターなんかではなく、ヨガリマクルメスブタだ。
匂いフェチの臭いメス豚。

あの動画と写真がある限り、彼女はもう俺のモノ同然だった。





祐子「はい、そのままグ〜っと背筋を伸ばして下さい。」

何だ？そんなにケツを突き出して、スパンキングでもされたいのか？
それとも、尻コキしてくっさいスベルマをぶっかけてやろうか？
イヤらしいパンティラインをくっきり浮かび上がらせやがって。

祐子先生のケツはあの日以来、臭そうに見えて仕方がない。
ああ、祐子先生と同じ格好になって、あのケツにピッタリと鼻を押し付けたい。

俺の頭の中は、ヨガどころでも結婚相手探しどころでもなくなっていた。
あの純潔の仮面を剥がしてやるのが、今の俺の生き甲斐だ。

俺は早速行動に移した。
レッスンが終わり、みんなが教室から出払ったのを見計らって、祐子先生に詰め寄った。

祐子「あら、進藤さん。どうしたの？」

あきら「クンクン…う〜ん、今日も汗の匂いがブンブンしますね、祐子先生。」

祐子「ちょっとやだ〜（笑）変なこと言ってないで、早く帰って下さいね〜。21時には施錠するから。」

あきら「あの時も鍵閉まっていたら良かったのにね。」

祐子「あの時…？進藤さん、今日は何か変よ。何か言いたいことでもあるの？」

あきら「変なのは祐子先生じゃないの？自分のパンティの匂い嗅ぎながらオナニーするなんてさ。」

祐子「…………えっ…」

一気に顔が赤くなり、俯く祐子先生。
何一つ返す言葉がないようだ。

あきら「あの日も鍵をかけてれば俺にバレずに済んだのに、鍵かけるのも忘れるくらいオナニーに没頭していたんだね。」

祐子「お願い、誰にも言わないで…」

あきら「だよ、ね、弁解のしようもないよね。俺は事実に基づいて喋ってるし、もちろん証拠も抑えてあるし。」

そう言って俺はスマホを振りかざした。

祐子「う、嘘でしょ…どうしてそんなことを！」

あきら「俺の前では素直になってもらう為にね。祐子先生の弱みを握ったんだよ。バラまかれなくなかったら、俺の言うこと聞きな。」

祐子「……何をすればいいの…？」

そう、よっぽどバカな女でない限りは、こうなるだろう。
俺は見学者用のソファに手を突いてケツを向けるよう命令した。





あきら「こんな間近で祐子先生のケツが見られるとは思わなかったよ。ブリッブリのいいケツだね。」

祐子「うっ…くっ……」

俺はピチピチのヨガパンツに包まれた祐子先生のケツを見ながら、シコリ始めた。
離れていても微かに感じる、祐子先生の汗の匂い。
触ってみると、ややしっとりとしていた。随分汗を吸い込んでいるんだろう。
時に鼻を近付けては、視覚と嗅覚で祐子先生の汗臭いケツを堪能した。

あきら「ああ、ヤバイ、もうイキそうだ…」

この数日間、スマホのディスプレイでずっと見てきた祐子先生の痴態。
そして目の前には、リアルな祐子先生が俺に向かってケツを突き出している。
この状況を想うだけで、俺はもう我慢が出来なくなっていた。

あきら「ああ、イクよ…祐子先生のケツにぶっかけるよ…ああ、ううう…っ！！」





あきら「あああ…すっげえ……」

俺は本番と言われる普通のセックスにはあまり興味がない。
それよりもむしろ、こうした状況でオナってみたいの方がよっぽど興奮してしまう。
目の前に生身の女を置いて、それをオカズにオナるなんて、なんて贅沢なんだろう。

俺の精液がべっとりと付いた祐子先生の哀れなケツを眺めながら、俺は最高の余韻に浸っていた。

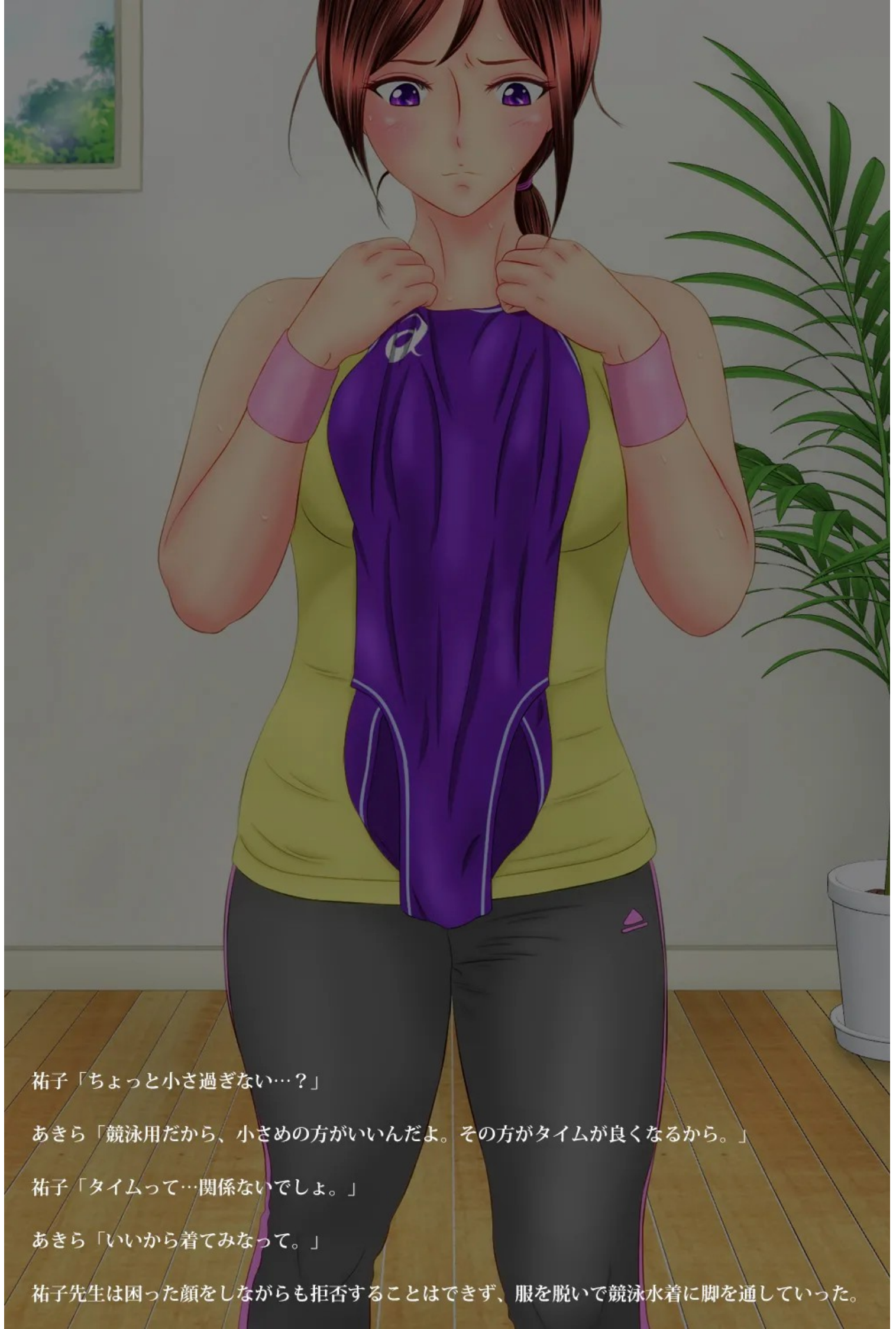
俺は今日、祐子先生に着てもらう為に、競泳水着を持ってきた。
祐子先生は程よく肉が付いていて、競泳水着が似合いそうな体つきをしている。
おそらく祐子先生にはワンサイズ小さいであろうSサイズを用意してきた。

あきら「祐子先生のヨガパンツ汚しちゃったから、これに着替えなよ。」

祐子「これって競泳水着だね…どうしてこんな物を…」

あきら「祐子先生に似合いそうだなって。ほら、合わせてみてよ。」





祐子「ちょっと小さ過ぎない…？」

あきら「競泳用だから、小さめの方がいいんだよ。その方がタイムが良くなるから。」

祐子「タイムって…関係ないでしょ。」

あきら「いいから着てみなって。」

祐子先生は困った顔をしながらも拒否することはできず、服を脱いで競泳水着に脚を通していった。





祐子「やっぱりかなりキツイわよ、これ。」

思った通り、ジャストフィットだ。

競泳水着に着替えて「キツイ」と困る女に対し、性的興奮を覚える男子は世の中に何人いるだろう。今出したばかりなのに、俺はすでにギンギンに勃起していた。

あきら「そう？初めてだとキツイかもしれないけど、ちょうどいいくらいだと思うよ。」

祐子「それで…競泳水着に着替えさせた今度は何をするつもりなの…？」

あきら「そうだなあ。とりあえず、後ろ向いてケツ見せてよ。」

祐子「ま、またお尻…？」

祐子先生は戸惑いながらも諦めがちに体を後ろに回転させると、パツンパツンのケツを見せてきた。





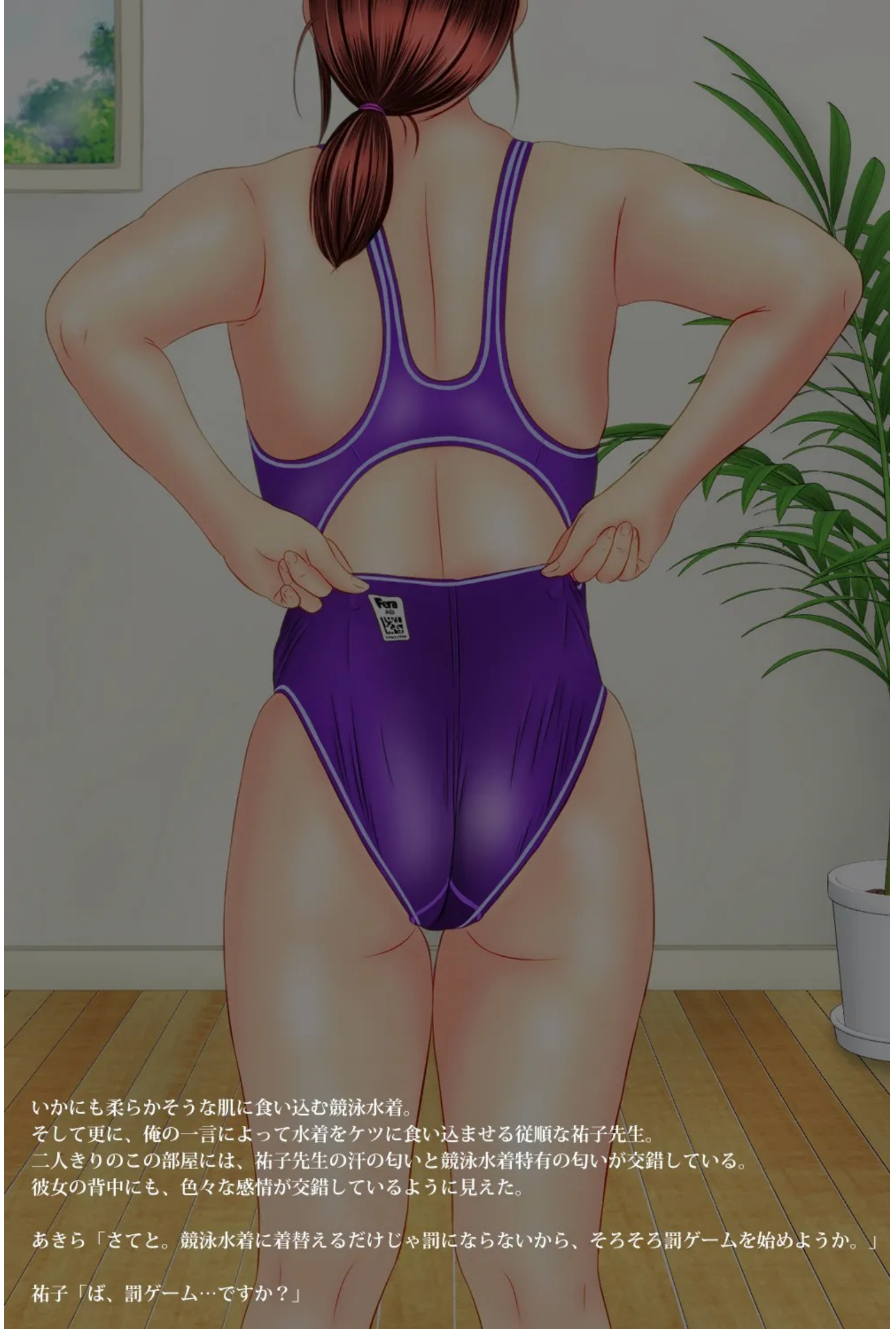
た、たまらない…持ってきてよかった！

おそらくは祐子先生、どうして競泳水着なのかと疑問に思っているだろう。
普通なら露出の多いビキニとか、極端なハイレグやTバック状の水着を選択するだろう。
しかし、いわゆる「セクシー水着」とされるそれらの水着、俺にとってはセクシーさの欠片もない。
エロさとはかけ離れた競技用の水着にこそ、本当の女の魅力が宿るのだ。

あきら「もう少し食い込ませてみてよ。」

祐子「う、うん…」





いかにも柔らかそうな肌に食い込む競泳水着。
そして更に、俺の一言によって水着をケツに食い込ませる従順な祐子先生。
二人きりのこの部屋には、祐子先生の汗の匂いと競泳水着特有の匂いが交錯している。
彼女の背中にも、色々な感情が交錯しているように見えた。

あきら「さてと。競泳水着に着替えるだけじゃ罰にならないから、そろそろ罰ゲームを始めようか。」

祐子「ば、罰ゲーム…ですか？」

俺は準備していたローターを祐子先生に手渡した。

あきら「これをマ●コに当たるように水着の中に仕込んで、戦士のポーズになって。」

祐子「そんな…この格好でヨガをやれって言うのッ!？」

あきら「そうだよ。早くしろ、変態ヨガインストラクター。」

祐子「くっ…!」

祐子先生は唇を噛み締めながら競泳水着の股布を捲り、ローターを入れる。
そして、初々しい競泳水着姿でゆっくりとヨガのポーズを取った。





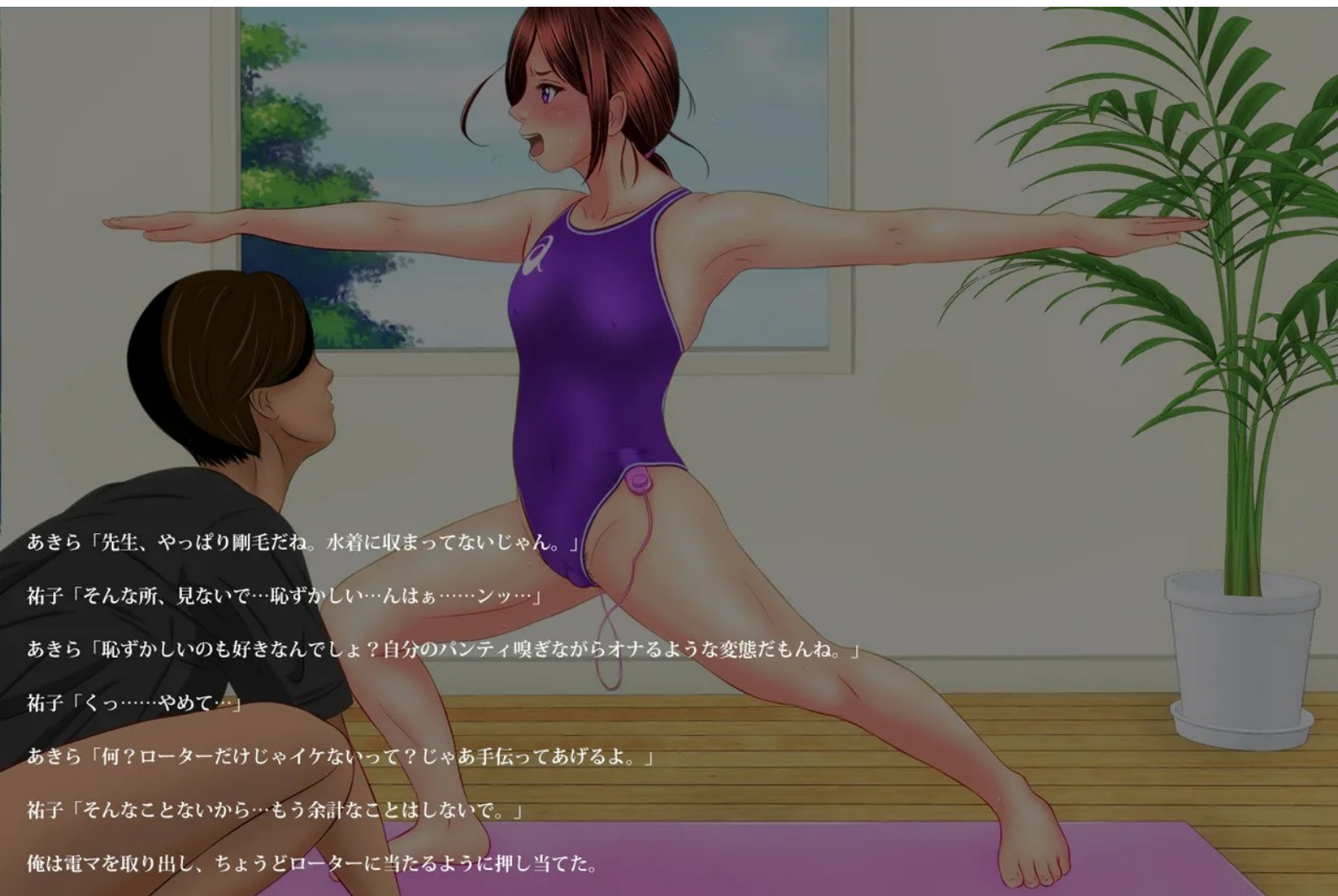
あきら「あはははは、いいじゃん！でも、普段より少しぎこちないんじゃない？」

祐子「うく……当たり前でしょ…こんな変なの入れてるんだから…ああ…ッ！」

あきら「この状態で5回イッたらクリアね。体勢崩したらゲームオーバー。」

祐子「そ、そんなん！？」





あきら「先生、やっぱり剛毛だね。水着に収まってないじゃん。」

祐子「そんな所、見ないで…恥ずかしい…んはぁ……ンッ…」

あきら「恥ずかしいのも好きなんでしょ？自分のパンティ臭いながらオナるような変態だもんね。」

祐子「くっ……やめて…」

あきら「何？ローターだけじゃイケないって？じゃあ手伝ってあげるよ。」

祐子「そんなことないから…もう余計なことはしないで。」

俺は電マを取り出し、ちょうどローターに当たるように押し当てた。





祐子「んあああああッ！！」

祐子先生は既に膝をガクガクさせ始めた。

あきら「先生、まだ始まったばかりだよ？何興奮してんの？」

祐子「興奮なんてしてない…ンッ…！」

あきら「競泳水着でヨガのポーズしてよがってるなんて、笑えるよな。」

祐子「ダメ、立ってられない…ああ…くふう…んっ…」

あきら「体勢崩したら、写真バラまいて動画もネットに流すから。」

祐子「そんな…ンッ…無理…ッ…ああ、ダメ……イキそう…あっ……イクううッ！！」

祐子先生はたったの一回も耐えきれず、両手両膝を付いて四つん這いに崩れ落ちた。

あきら「それでもヨガの先生？しっかり精神統一してないからそうなるんだよ。」

祐子「こ、こんなの…ヨガじゃないわ…」

あきら「どうでもいいけどさ、ゲームオーバーだから。これから家に帰って早速動画をネットに流して、明日は写真を現像しなきゃ。」

祐子「そんな…お願い、それだけは許して下さい。」

あきら「じゃあ、流されるなら写真か動画、どちらがいい？」

祐子「どっちもイヤ…」

あきら「祐子先生わがままだね。だったら、俺を気持ちよくしてくれたらもう一回チャンスあげてもいいけど。」

祐子「気持ちよくって…何をすればいいの？」

あきら「そうだなあ…やっぱりオーソドックスに、フェラとか。」

祐子先生は俯きながら、しばらく考えているようだった。
そして、意を決したように顔を上げ、こう言った。

祐子「フェラするから…もう一回チャンスを下さい…」





祐子「んぐっ…んふっ……ンッ…ジュブッ……んふっ……」

俺は四つん這いに崩れ落ちたままの状態で祐子先生にチンポをしゃぶらせた。
もちろん、ローターは入れたままで。

あきら「ヨガにもこんなポーズあったよね。牛のポーズだっけ？ま、祐子先生は牛じゃなくて豚だけど。」

祐子「んふっ…ンッ……んぐっ…ジュボッ……ンッ…」

あはは、最高だな。
高嶺の花だと思っていた祐子先生が、俺に豚呼ばわりされながら一生懸命しゃぶってるなんて。

あきら「気持ちいいよ、祐子先生。ちゃんと俺の目を見ながらしゃぶってね。」

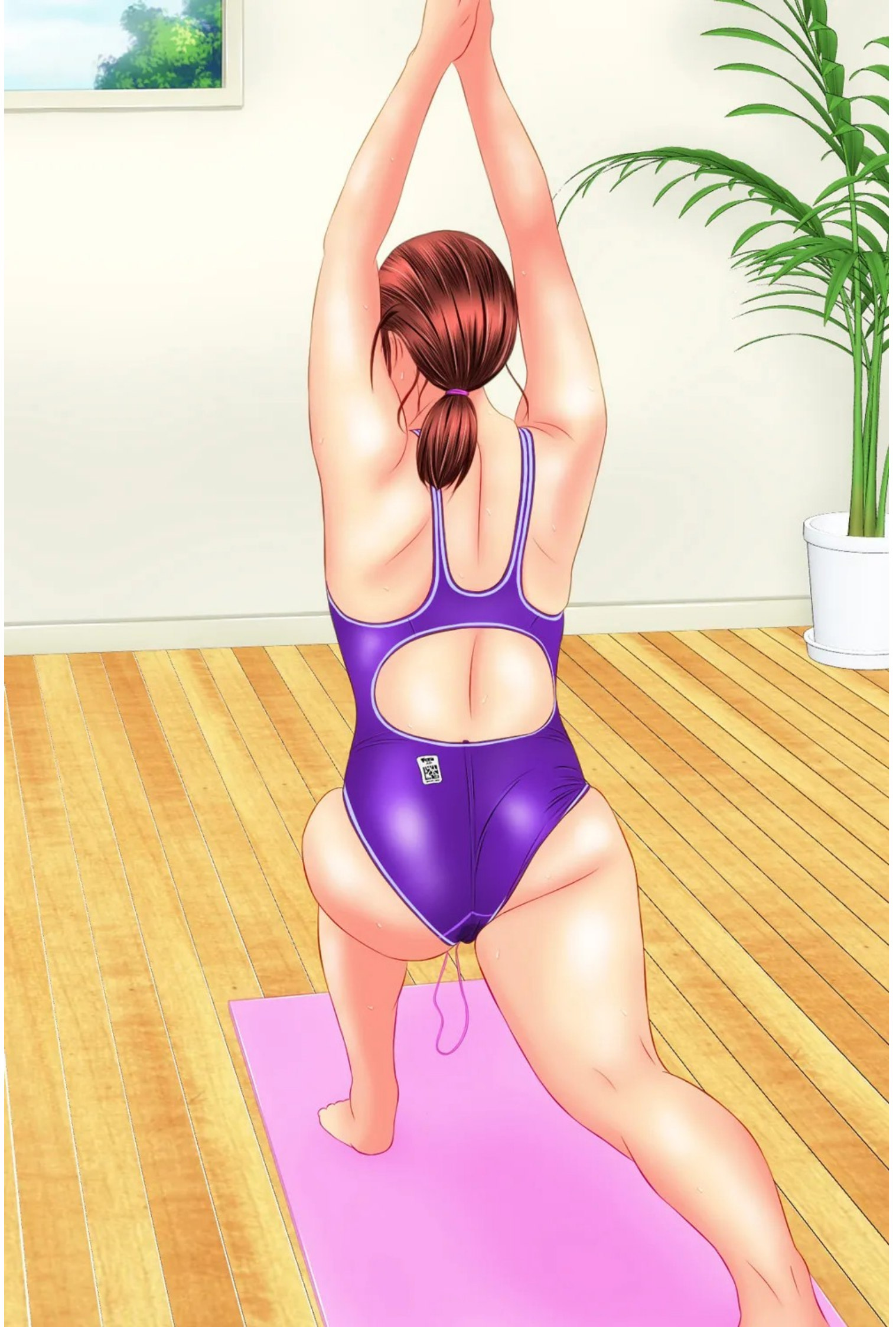
祐子「ンッ…んふっ……んぐっ…ンッ……んはぁ…ハア……もういいでしょ…」

祐子先生は涙目で俺に訴えてくる。
なんて可愛いメス豚なんだ。

あきら「わかったよ。じゃあ、もう一回チャンスあげるね。もう一つ戦士のポーズがあったよね？体を反らすやつ。」

祐子「次は…もう余計なことはしないで。ちゃんと自分だけでイクから。」

あきら「へ～、それは楽しみだ。」



A woman with reddish-brown hair in a ponytail is seen from behind, performing a yoga pose on a wooden floor. She is wearing a purple one-piece swimsuit with a large cutout on the back. Her arms are raised high, and her hands are clasped together above her head. The background shows a light-colored wall, a framed picture of a landscape, and a potted plant with long green leaves.

今度はさっきのぎこちなさはなくなっていて、いつもの祐子先生らしい綺麗なポーズだった。
なんとしても条件をクリアしたいようだ。
そんな健気さが、俺を更に欲情させるのだが…。

祐子「あっっ！？んんうううう…ツ！！」

あきら「あっはは、どうしたの？そんなデカイ声出して。」

おそらくローターがマ●コの中に滑り込んだんだろう。
キツキツの競泳水着を着てこんなポーズをすれば、例え濡れてなくても入ってしまうはずだ。
さっき一回イカされている祐子先生なら、簡単に入ってしまうだろう。

祐子「くうううう…ンツ……あぁ…あんっ……うう…ヤバい…」

あきら「だから言っただろ？小さい水着の方がタイムが良くなるって。早くイケるってことだよ。」

祐子先生はさっきと同じように膝をガクガクさせながら、でも必死に耐えているようだった。

祐子「あああああ、イク…イクラッ！！！！！」

その努力も虚しく、結局はイクと同時に腰から砕けるようにまた崩れ落ちた。

祐子「こんなの無理…どれだけバランスを保っても、どうにもできない…」

祐子先生は肩で息をしながら、諦めたように言った。

祐子「進藤さん…どうすれば許してくれますか…」

あきら「う～ん…許す許さないじゃなくて、祐子先生が俺を受け入れ続けるかどうかだけだよ。」

そう、俺は別に怒ってるわけじゃない。

むしろあんな痴態を俺に見せてくれたことに感謝しているくらいだ。

それなのに彼女は俺に許しを乞う。

これはすでに、主従関係が成り立っていることを意味していた。

あきら「もう一回、祐子先生をオカズにシコロっかな。」

俺はもっと祐子先生の匂いを感じたくて、彼女に次の命令をした。





あきら「そうそう、その位置ね。あぁ、くっせ〜。祐子先生のマ●コ、すごい匂ってるよ。」

祐子「くっ…なんでこんな恥ずかしいことを…」

あきら「恥ずかしいと嬉しいマゾのくせに。乳首もこんなに勃起させてるのは誰だよ？」

祐子「あうううッ！！」

俺は祐子先生の乳首を競泳水着の上から摘み上げた。

あぁ、たまんない…！

酔漬けイカのようなマ●コの匂いを鼻先で感じながら、コリコリの乳首を摘み、そしてオナる。こんな夢のようなプレイを、汗にまみれた美人ヨガインストラクター相手に実現できるなんて！

あきら「祐子先生、笑ってよ。インストラクターは笑顔が大事だよ。」

祐子「こんな状況で…笑えるわけない。」

あきら「いいから笑えよ。命令だから。できなかったらどうなるかわかってるだろ？」

祐子「……ッ…」





俺の目線からは見えないけど、彼女が頑張って笑顔を作っているのは空気で感じていた。そんな引きつった彼女の笑顔を想像しながら、俺のチンポはどんどん大きくなっていく。

あきら「祐子先生にお願いがあるんだけど、いい？」

祐子「何ですか…」

あきら「『小島祐子のクサマンを嗅ぎながら、射精するところを見せて下さい』って言ってみて。」

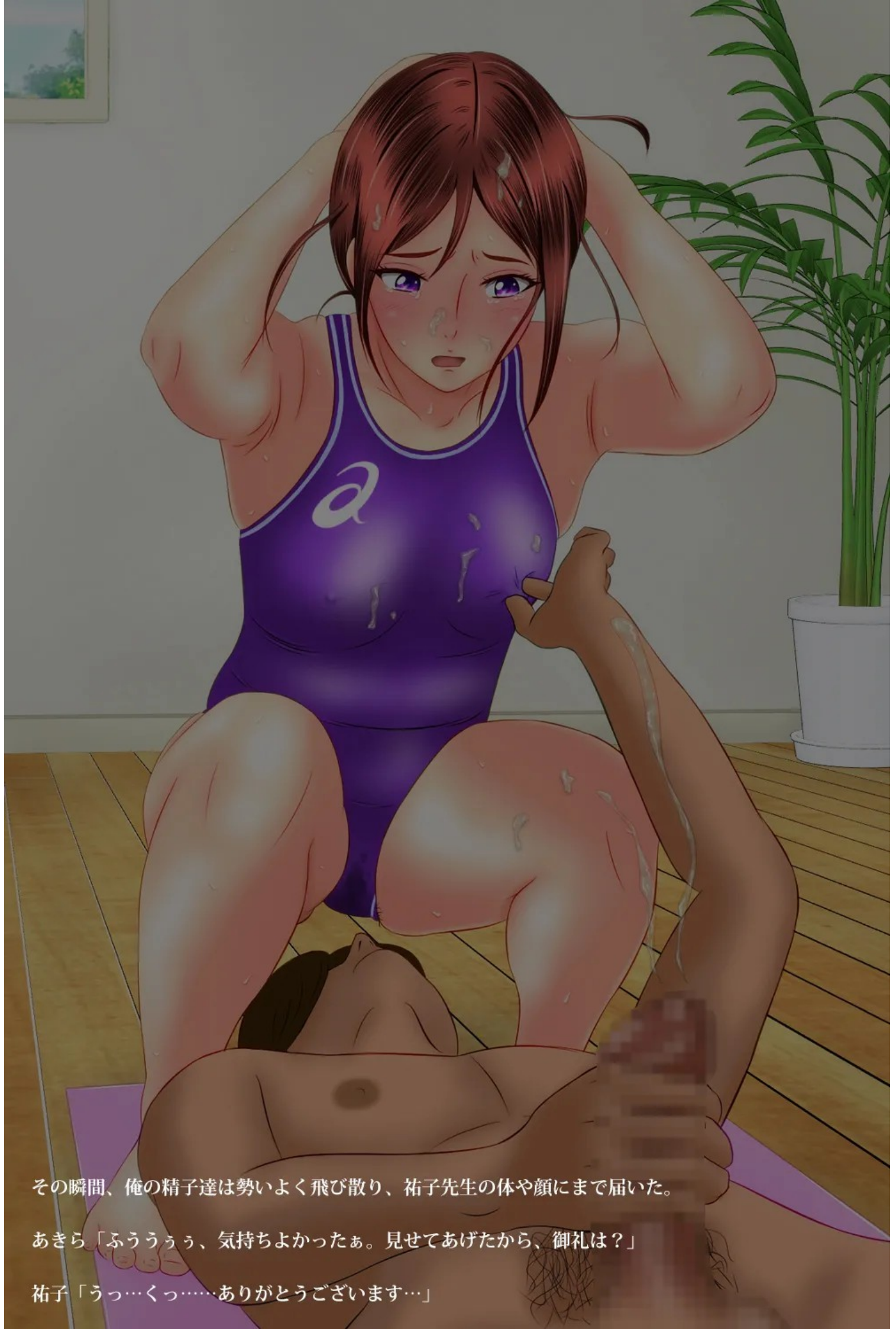
祐子「そ、そんな……」

あきら「自分がクサマンなのはわかってるよねえ？一生懸命パンティの匂い嗅いでたもんね。ほら、早く言えよ。」

祐子「……小島祐子の…く…クサマンを嗅ぎながら…射精するところを見せて下さい……」

あきら「ああ、イクッ！！！！！」





その瞬間、俺の精子達は勢いよく飛び散り、祐子先生の体や顔にまで届いた。

あきら「ふうふう、気持ちよかったぁ。見せてあげたから、御礼は？」

祐子「うっ…くっ……ありがとうございます…」

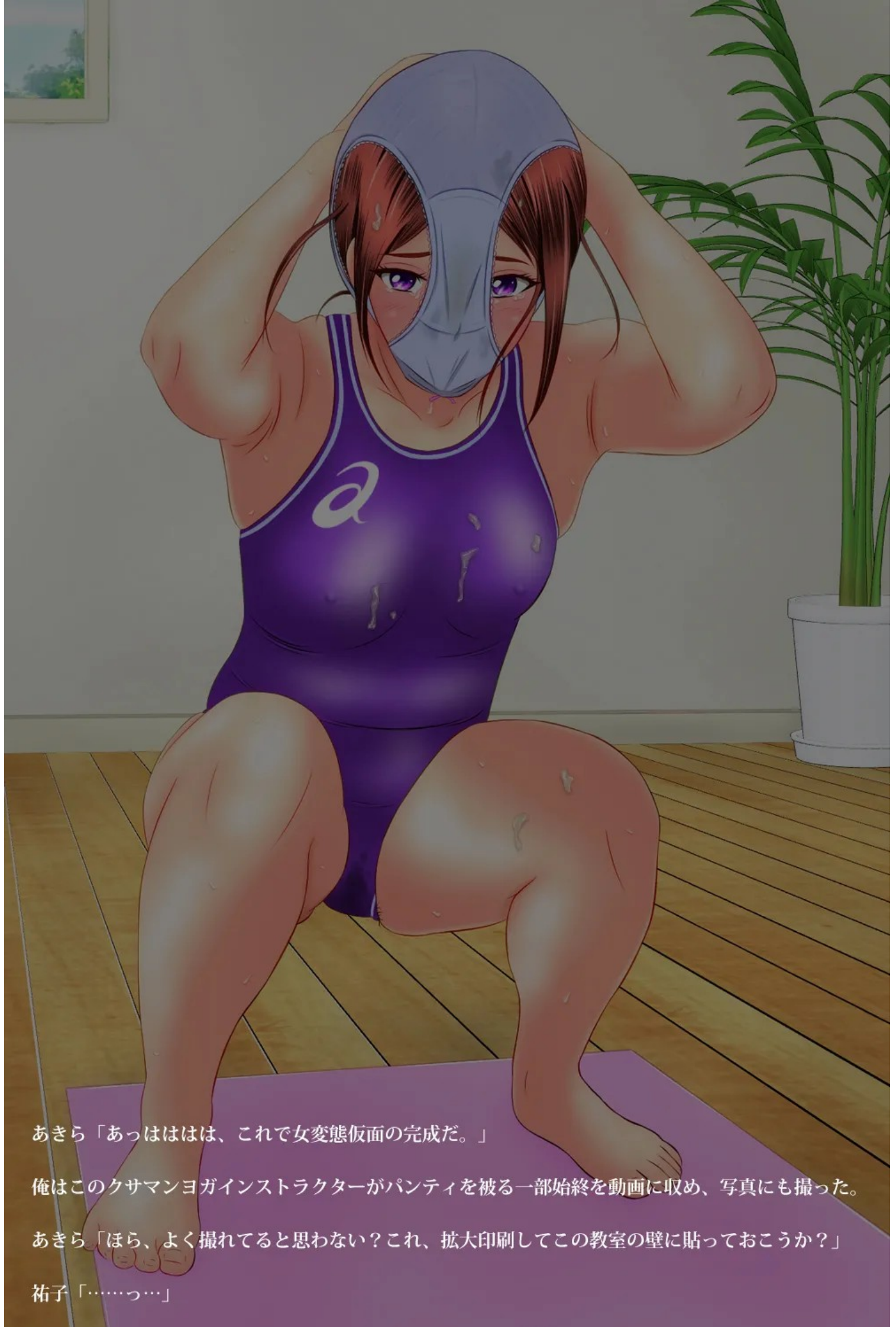
彼女の心は折れかかっている。
逃れようのない状況で、反抗の余地もない。
俺は更に彼女を追い込む為、そして彼女を俺のモノにする為に、最後の命令を下す。

あきら「祐子先生、これ頭に被ってよ。」

祐子「えっ…そ、そんなっ!？」

あきら「好きなんだろ？ほら、クロッチが鼻に当たるように被ってよ。」





あきら「あっはははは、これで女変態仮面の完成だ。」

俺はこのクサマンヨガインストラクターがパンティを被る一部始終を動画に収め、写真にも撮った。

あきら「ほら、よく撮れてると思わない？これ、拡大印刷してこの教室の壁に貼っておこうか？」

祐子「……っ…」

彼女は絶望感に覆われていた。

もちろん、この写真を新たなネタとして彼女を脅迫し、また新たなネタを撮る。
このスパイラルから逃れることはできない。

俺は引き締まった体よりも、結婚相手よりも得難い、とてつもない宝物を手にした気分だった。

YOGAって競泳水着 終

企画・制作 二次元スタジオ BLACK★BASE